特集・〈音〉を書く　シンポジウム(1)　〈音〉と説話

# 声の発見、声の喪失

石井正己

## 一　古代文学研究の四〇年を振り返って

振り返ってみれば、一九七〇年代は古代文学研究の大きな転換点にあった。折しも一九七二年に沖縄がアメリカから返還され、一群の研究者が沖縄に向かった。柳田国男や折口信夫が作ったイメージは、戦争による荒廃を経ても変わることがなかった。文献の乏しい古代文学に発生論から迫ろうとするとき、沖縄の祭祀・祭礼や伝承は大きな示唆を与えるものだった。沖縄に向かった研究者がそこにまざまざと「生きた古代」を見ようとしたことは、疑う余地がない。

また、一方で、南の沖縄ではなく、北のアイヌに向かった一群の研究者があった。柳田は金田一京助のアイヌ研究を支援したが、民俗学が確立するのと差し替えに、アイヌ研究は居場所を失った。知里真志保に受け継がれたアイヌ研究は、日本国内にありながら民族学の中に位置づけられることになる。沖縄の場合は琉球方言として日本語の中に囲い込まれたが、アイヌ語は日本語の外に出されたので、古代文学との関係は単純にはいかなかった。

やがてそれらの成果は一九八〇年代にかけて次々と発表され、保守的な古代文学研究に対する革新的な運動となっていった。しかし、古代文学研究者は沖縄研究やアイヌ研究そのものにおいて成果を上げることはほとんどなかった。この点で、民俗学者や民族学者とは決定的に異なっていた。その点で、古代文学研究のための沖縄であり、アイヌでしかなかったという批判を免れることは難しい。その結果、一九九〇年代に入って「生きた古代」を見ることができなくなると、ほとんど一斉に引き上げてしまったところによく表れている。

そうした状況の中で、一九九〇年代以降、大きく二つの動きが始まったように思われる。一つは民族学に接近しながら、中国少数民族の調査が始まる。その背景には中尾佐助や佐々木高明の唱えた照葉樹林文化論があり、歌垣のルーツへの探究が見られる。もう一つは平城京のみならず、日本各地で発掘された土器や木簡への関心が高まる。そこでは考古学や歴史学との連携が図られてゆくことになる。ただし、前者は時代が異なる伝承資料であるのに対し、後者は時代が重なる文字資料であるという点で、研究の方向は二分化したと言えるかもしれない。

このように四〇年を概観したとき、今、古代文学研究はどこに向かおうとしているのか。その動向に深い関心を寄せつつも、私自身は一九九〇年代から柳田国男のテクストへの見直しを始めた。生前から刊行が始まった『定本柳田国男集』はかなりの文章を網羅し、「総索引」「書誌」「年譜」が付いて便利に使われた。それらを駆使した研究が量産され、やがて植民地主義に加担したかどうかをめぐって、批判と擁護に二分化した。しかし、どちらも同じ穴の貉であり、そこから新しい研究が始まるとは思えなかった。

遡れば、柳田国男の没後、民俗学者は「柳田以後」を標榜して、研究史の中に封印してしまった。柳田そのものに深い関心を寄せたのは他の研究分野の人々であり、なかでも思想史家が熱心だった。彼らは民俗学者が抱え込んだ「柳田神話」にこだわることなく、自分の研究に引き寄せて自由に論じることを可能にした。橋川文三や後藤総一郎は伝記研究を進めたが、やはり『定本柳田国男集』に乗ったかたちであり、補足するものに過ぎなかったことは否定できない。

そうした中で、私が最も深く関わったのは一九一〇年に刊行された『遠野物語』だった。すでにおびただしい文章を書いてきて、もう使い古した感じもするが、改めて、『遠野物語』を古代文学研究の場に引き出すことにした。その際、今回のテーマである声の視点から、このテクストを徹底的に読み直してみる。そうして見ると、声を仲立ちに生まれるテクストの様相が随所に立ち現れてくるが、その叙述は、中央語／地方語、標準語／方言、漢字／平仮名／片仮名のはざまで、かろうじて成り立っていることがわかる。文字によって声は発見されるが、一方で、文字によって声は喪失されてゆくのではないか。そのような視点に立って、これまでの研究を回顧しながらも、これからの古代文学研究への提案をしたいと考えている。

## 二　吉本隆明『共同幻想論』の引用の作為

生前はタブーであった柳田国男研究が始まり、その本格的な幕開けになったのは、一九六八年に刊行された吉本隆明の『共同幻想論』（改訂新版は一九八二年）だった。これは『遠野物語』研究の出発点でもあったが、当初から『遠野物語』そのものを研究することが目的でなかったことは注意される。吉本の目的は『遠野物語』を使って国家が発生してゆく原理を説こうとした。その点で、その後の柳田研究からは一線を画するところがあって、今も孤立している。

その際の作業仮説は、二〇世紀の『遠野物語』を八世紀の『古事記』より前に置いてみることにあった。これをどう見るかは、吉本の評価の分かれ目となるだろう。先に見たように、沖縄やアイヌに向かった古代文学研究者は、当然のことながらその仮説を支持する立場に立った。二〇世紀の沖縄やアイヌを考えることが、古代文学の解明につながると考えた直接の根拠は、『共同幻想論』にあったと見て間違いない。それを沖縄やアイヌの現場を通して、より実証的に明らかにしようとしたにちがいない。

だが、改めて、『共同幻想論』を読むならば、『遠野物語』と『古事記』がそれにふさわしいように仕立てられていることに気が

つく。例えば、「禁制論」で村人たちの〈恐怖の仕方〉を論じる際に引く『遠野物語』の三話は、「村の若者が猟をして山奥にはいってゆくと、遥かな岩の上に美しい女がいて、長い黒髪を梳いていた。とうてい人がいるような場所ではなかったので、男は銃をむけて女を撃った」と始まる。平易な口語体を使って、内容を一般化している。

これに対応する原文を見ると、「栃内村和野の佐々木嘉兵衛と云ふ人は今も七十余にて生存せり。此翁若かりし頃猟をして山奥に入りしに、遥かなる岩の上に美しき女一人ありて、長き黒髪を梳りて居たり。顔の色極めて白し。不敵の男なれば直に銃を差し向けて打ち放せしに、……」とある。文語体を使ったばかりでなく、地名や人名が明らかであり、老人の回顧談として語られたこともわかる。佐々木嘉兵衛はこの話の登場人物であるが、おそらく語り手でもあったにちがいない。

さらに言えば、佐々木嘉兵衛は女を撃ち殺した後、証拠に黒髪を持ち帰ろうとするが、それを男が奪い返しに来ると話は展開する。この話の冒頭には「山々の奥には山人住めり」、末尾には「山男なるべしと云へり」とあって、冒頭の伝承が末尾の推測の根拠になっている。計算された見事な構成と言えよう。吉本は山人と出遇った恐怖を〈共同幻想〉として説くが、やはり〈共同幻想〉は既存のものではなく、言葉によって創られることがはっきりしている。

この引用の方法を取り上げただけでも、吉本は『遠野物語』を自分の論理に合うように加工してしまったことが知られる。しかし、『遠野物語』の研究がここまで進んでくると、それは明らかな作為であったと言わざるを得ない。もちろん、吉本は自分の論理に合わせて加工することは当然だ、と考えていたにちがいない。しかし、それは『遠野物語』が紛れもなく二〇世紀の産物であったことを抹殺する行為だったのではないか。

こうした引用のあり方は、「後記」で、「もちろん『遠野物語』のかわりにべつの民譚集のすべてであってもよかった」と述べた口吻と見事に対応している。これは、『遠野物語』を引用するにあたって、すっかり加工したのは、その固有性を剥ぎ取るためだったことを証言したことになる。自分の述べたことが普遍性を持つということに対する自信だったのだろうが、あまりにも気負いすぎているのではないか。こんなことを述べなければ落ち着かないないところに、吉本のあせる心情がよく表れている。

そのことは、実は、『共同幻想論』に依拠しながら、沖縄やアイヌに向かった古代文学研究者にもそのまま当て嵌まるのではないか。吉本がそうであったように、「生きた古代」を見ようとしたが、「生きた現代」に対してはまったく目を向けようとはしなかった。しかし、それでは『遠野物語』を読むこともできなければ、沖縄やアイヌを捉えることもできない。そうした反省に立って、私の『遠野物語』研究は、実は、「生きた古代」が同時に「生きた現代」でもあることを述べたと言っても、言い過ぎにはならない。

## 三　『遠野物語』に関する二つの言説

声の視点を深めてゆくために、もう少し『遠野物語』に入り

込んでゆくことにする。例えば、柳田は、一九五三年の伊東圭一郎との対談「民俗学と岩手」（『岩手日報』）で、『遠野物語』の聞き書きの現場を回想している。四三年後の回想なので、信憑性を疑問視する向きがあるかもしれないが、むしろ、それほど強烈な印象だったことが知られる。一九五一年には創元文庫版の『遠野物語』も刊行されていて、民俗学者のみならず、すでに多くの人が『遠野物語』を目にするようになっていた。

その時の談話によれば、水野葉舟が連れてきた佐々木喜善は、「いろいろ話すが、なんとしても、ナマリがひどくて言葉が通じない。だんだんわかるようになりましたが、……」という状態だったという。佐々木は作家志望の青年であったが、「話を持っているのには、ともかく、びっくりしました」と驚くほどであった。佐々木は声の世界にどっぷり浸かって生きてきたが、柳田はその声を聞き取ることにずいぶん苦労したらしい。

そうしたこともあったためか、「これは文章には、なかなか苦心しました」とも言っている。先に見たような文語体の文章に仕立てたことを指すのであろう。だが、あのような文体は訛りばかりでなく、佐々木の語った言葉をほとんど標準語に翻訳してしまうものであった。後に録音の技術が普及すると、「語りたるまま」「聞きたるまま」に文字化することが一般化するが、『遠野物語』は序文に言うとおり、「感じたるまま」に書かれたのである。そうした点で言えば、主体はことごとく書き手の側にあったと言ってもいい。

柳田の文体は、後に多くの人が高い評価を与えることになる。しかし、あの文体に大きな違和感を抱いた人物がただ一人いた。佐々木と同じ東北出身の井上ひさしである。扇田昭彦は一九八〇年刊行の新潮文庫版『新釈遠野物語』の「解説」で、井上の言葉を代弁している。井上は、「『遠野物語』が名著であることは、むろん疑いようがない。だが、元来が語りものであった土地の昔話が活字として定着したとき、大きなものが失われてしまうことにも注意しなくてはならない。さらに東北出身である私には、どうもこの名著に〝収奪〟という感じを抱いてしまう」と言ったという。

この「大きなもの」というのは、文字によって失われる声を意味しているにちがいない。皮肉なことに、「名著」はそうして生まれたのだと述べたのである。多くが絶賛する中で、こうした指摘ができたのは、井上が東北出身であったばかりでなく、劇作家であったことが大きいにちがいない。そうした批判精神をもとに書いたのが、一九七六年の『新釈遠野物語』だった。ここには、扇田が言うように、「『遠野物語』では省略されていたもの、つまり昔話の語り手と聞き手、そして語りの調子を復活させた」ことは間違いない。

だが、『新釈遠野物語』は地の文も会話も共通語であった。実は、井上自身の中でも、土地の言葉が発見されるまでには、さらに時間がかかった。一九八〇年の『花石物語』は吃音の主人公を取り上げ、東京の言葉ではなく、土地の言葉で癒やされてゆく様子が描かれる。さらに一九八一年の『吉里吉里人』では吉里吉里国の独立が土地の言葉と不可分の関係にあることを表明している。井上の作品が『遠野物語』に対する違和感から展開していったと考えるならば、その見取り図はかなり明確に

描くことができるように思われる。

一方、『遠野物語』の舞台となった遠野では、岩手国体が開催された一九七〇年から語り部の活動が始まる。そこで披露されたのは、『遠野物語』にある話であったが、それはまったく「創られた伝統」でしかなかった。観光客に『遠野物語』は今も生きていると幻想させる効果はあったが、『遠野物語』に対する批判精神は生まれなかった。商品としての『遠野物語』が流通し、それに便乗しようとする動きが加速したにすぎず、残念ながら、『遠野物語』を読み込んで、厳しく対峙するような声の文化が生まれる余地はまったくなかった。

## 四　『遠野物語』に見る表記の位相

井上ひさしから「〝収奪〟」と批判されたが、本当にそれだけだったのだろうか。『遠野物語』を読んでゆくと、しばしば目につくのはカタカナ表記の単語である。一一話は孫四郎という息子が母を殺す話だが、その際、「ガガはとても生(イカ)しては置かれぬ。今日はきつと殺すべし」と殺人宣言をする。緊迫感のある会話には、「ガガ」という言葉が必要だと考えたにちがいない。頭注には、「ガガは方言にて母といふことなり」とある。カタカナ表記は万葉仮名のようなもので、語り手の声を忠実に残したことを示している。こうした方言に関する頭注は随所に見られる。

一方、五三話は「時鳥と兄弟」と呼ばれる小鳥前生譚であり、この場合は姉妹の話になっている。猜疑心を抱いた妹によって殺された姉は、郭公になる。その叙述は、「忽ちに鳥となり、ガンコ、ガンコと啼きて飛び去りぬ。ガンコは方言にて堅い所と云ふことなり」とある。遠野の人が読み手ならば、「ガンコは方言にて堅い所と云ふことなり」は不要だったはずである。しかし、遠野以外の人が読むことを前提にしているので、このような注釈的な叙述が入り込むのである。

こうしたカタカナ表記は、口頭伝承の声を発見し、標準語に置き換えられない土地の言葉を保存してゆく。やがてカタカナ表記は民俗語彙の表記法に展開するが、そうした視点の芽生えがここに見られる。しかし、基本的には声を残すことは、最初から断念してしていたと見なければならない。というよりも、標準語で書かなければ、広く読まれるものにならないと考えていたにちがいない。むしろ重要なのは、当時はすでに一般化していた口語体ではなく、擬古的な文語体を採用したことにある。だが、それによって、口語体では表せない微妙な臨場感が生まれたことは否定できない。

そうしたことを念頭に置きながら読んでゆくと、漢字表記の中にも土地の言葉が埋もれていることに気がつく。六話は、「遠野郷にては豪農のことを今でも長者と云ふ」という一文から始まる。この「今でも」は、中央では「豪農」を「長者」とは呼ばなくなったが、遠野には「長者」が「豪農」の意味で使われていることを示す。そうした標準語と土地の言葉が連続する場合には、カタカナ表記は採用せず、漢字表記にしたらしい。

だが、事はそう単純にはいかない。一一五話は、「御伽話(オトギバナシ)のことを昔々(ムカシムカシ)と云ふ」と始まる。中央で巌谷小波らが「御伽話」と呼んでいる話を遠野では「昔々」と呼んでいた。これにはわ

ざわざ「ムカシムカシ」というカタカナの振り仮名が付く。柳田が周到にこの表記を採用したのは、続く一一六話の「牛方山姥」の話が「昔々ある所に」と始まり、「昔々の話の終は何れもコレデドンドハレと云ふ語を以て結ぶなり」と終わることと対応する。柳田は遠野における昔話の語りの形式を発見していたのである。この話はその伝説と違う昔話なので、その語り口がよく残されている。

また、一一一話には、「ダンノハナと云ふ地名あり。その近傍に相対して蓮台野と云ふ地あり」とある。地名の「ダンノハナ」はカタカナ表記、「蓮台野」は漢字表記になっている。頭注には「ダンノハナは壇の塙なるべし」とあって、語源を推測しながらも、慎重にカタカナ表記を採用している。それに対して、「蓮台野」は遠野では「デンデラ野」(「遠野物語拾遺」)や「デエデアラ野」(『聴耳草紙』)と呼んでいたと思われるが、「蓮台野」の訛ったものと見て、標準語に翻訳してしまった。「蓮台野」は京都にある地名であり、墓地や死者を葬送する場所を表す。中央との連続性が重視されたことは明らかである。

例は少ないが、カタカナ表記と漢字表記が徹底せず、混成した場合がある。六二話の「魔除けのサンヅ縄」、九七話の「菩提寺なるキセイ院」のような例である。「サンヅ縄」は埋葬するときに棺を結わえて降ろす縄なので、「三途縄」であろうし、「キセイ院」は「喜清院」のことである。柳田は佐々木にどのような漢字で書くか、何度も尋ねたと思われるが、結局わからなかったときには、こうしてカタカナで残したのだろう。そのあたりにも、声を無視しなかった態度が垣間見える。

## 五　『遠野物語』の地名起源譚と『風土記』

思えば、『遠野物語』には、柳田国男が古代文学との関連を見ていたふしがある。三二話は、「千晩ケ嶽(センバガダケ)は山中に沼あり。此谷は物すごく腥(ナマグサ)き臭(カ)のする所にて、此山に入り帰りたる者はまことに少し。昔何の隼人(ハヤト)と云ふ猟師あり。其子孫今もあり。白き鹿を見て之を追ひ此谷に千晩こもりたれば山の名とす。其白鹿撃たれて遁げ、次の山まで行きて片肢(カタアシ)折れたり。其山を今片羽山(カタハヤマ)と云ふ。さて又前なる山へ来て終に死したり。其地を死助(シスケ)と云ふ。死助権現とて祀れるはこの白鹿なりと云ふ」とあり、これが全文である。

この話は、何の隼人という猟師が千晩籠もったので「千晩ケ嶽」、白鹿の片肢が折れたので「片羽山」、白鹿が前の山に来て死んだので「死助」という地名が生まれたという地名起源譚になっている。この話の頭注には、「宛然として古風土記をよむが如し」とあり、八世紀の『風土記』を連想していたことがわかる。柳田の故郷の『播磨国風土記』賀毛郡の「鹿咋山」の条には、品太(応神)天皇が狩りに出て白鹿に遇った話があり、『尾張国風土記』逸文の「川島社」の条には、神が白鹿に化した話がある。おそらくこうした話を念頭に置いて入れた頭注にちがいない。

だが、『遠野物語』の地名について顕著に見られるのは、その起源をアイヌ語から説明しようとした頭注である。九話は、菊池弥之助という笛の名人が駄賃附に出たとき、大谷地で笛を吹くと、何者かが「面白いぞー」と言ったという話である。「大

谷地」について、「ヤチはアイヌ語にて湿地の義なり内地に多くある地名なりヤツともヤトともヤとも云ふ」という頭注がある。この時期に進んでいた地名研究の成果がこうして示されている。

やや複雑なのは、六八話の阿部（安倍）貞任と八幡太郎源義家の合戦を語った伝説である。双方が矢戦をした間に「似田貝（カヒ）」という部落があるが、ある時、八幡太郎が通ったとき、粥が多く置いてあるのを見て、「これは煮た粥か」と言ったことから、この地名が生まれたのだと語る。頭注には、「ニタカヒはアイヌ語のニタト即ち湿地より出しなるべし地形よく合へり西の国々にてはニタともヌタともいふ皆これなり」とある。「地形よく合へり」というのは、「戦の当時此あたりは蘆しげりて土固まらず、ユキユキと動揺せり」という叙述を指している。

このように、ストーリーの展開から地名は生まれたが、アイヌ語に起源を求めるように語られることはない。本文で僅かにそれを匂わせるのは、一話の「谷川のこの猿ケ石に落合ふもの甚だ多く、俗に七内八崎（ナナイヤサキ）ありと称す。内（ナイ）は沢又は谷のことにて、奥州の地名には多くあり」であろうか。ここには本文にも頭注にもアイヌ語への言及はない。だが、「内」のつく地名は東北の山間地に見られ、アイヌ語に起源を持つとする説が有力である。柳田の説が本文に入り込んだと思われるが、それを佐々木自身の話にしたために、こうした叙述になったのではないか。そのぶん不徹底さが残っている。

柳田は佐々木の話に出て来る地名にアイヌの痕跡を見ようとした。出典を明示していないが、その際に依拠したのは、一九〇五年にJ・バチェラーが著した『アイヌ。英。和辞典及アイヌ語文典　第二版』だったと思われる。辞典なので、わざわざ出典を明記する必要はないと考えたにちがいない。アイヌ語の解釈はバチェラーのものだが、それを佐々木の話に結びつけて、頭注として示したのは、他ならぬ柳田である。

声という問題ならば、地名を漢字表記にして、多くの場合は丁寧にカタカナで振り仮名をつけたということで足りる。漢字があてられなかったときには、四二話の「ヲバヤ」のような表記が残るが、これは少ない。遠野で一般化した表記が見られなければ、意図的に「ダンノハナ」のように残したことはすでに見た。これだけ丁寧に地名の漢字表記がなされたのは、柳田が佐々木にどのように書くのか尋ねた結果にちがいない。佐々木は文字を持つ伝承者であった。

すでに見た六八話の頭注「地形よく合へり」のように、本文との対応を指摘した場合もあるが、基本的には直接関係がなくてもアイヌ語起源で説明している場合が多い。そのぶんアイヌ語説は自立していて、佐々木の話に寄りかかることがない。そのため、アイヌとの接点を切り捨て、一国民俗学に向かおうとすると、このような頭注は邪魔になる。一九四八年の文芸春秋新社版『遠野物語』はこうした注記をすべて削除し、一国民俗学にふさわしいテクストに仕立て直したことがわかってくる。

## 六　『遠野物語』の振り仮名と音読の関係

すでに見て来たように、『遠野物語』は簡潔な文語体で書かれている。全体を古めかしい標準語にすることによって、地域

と時代を超えてゆく普遍性を獲得した。だが、声という視点から見れば、それは声を抹殺することによって成り立ったと言わねばならない。確かに、今日のように録音の技術があって、「語りたるまま」「聞きたるまま」に再現することは困難だった。それ以上に、そのようにして書くことなど、当初から想定していなかったにちがいない。

にもかかわらず、すっかり声を抹殺せずに、どうしてもその言葉でなければならないと考えた場合には、残すことを心がけた。それは特に会話文に見られる。例えば、六話では、猟師が山中で会った長者の娘に銃を向けたとき、娘は「何をぢではないか、ぶつな」と言った。「をぢ」は次男以下の子弟を意味し、「ぶつ」は「撃つ」の意味である。緊張感のある場面では、佐々木が語った声をそのまま残したのである。

また、すでに見て来たように、単語レベルでカタカナ表記が見られるばかりでなく、『遠野物語』に見られるカタカナ表記は振り仮名に顕著に現れる。例えば、六八話ならば、「厨川(クリヤガハ)の柵(シャク)」「八幡沢(ハチマンザワ)の館(タテ)」のように、地名ばかりでなく、丁寧な振り仮名がカタカナでつけられている。読みにくい単語と考えて、意識的につけた場合もあるが、誤解を恐れずに言えば、カタカナ表記の多くは佐々木が柳田に語った声を残そうとしたにちがいない。佐々木の声はこうした箇所に細やかに残されていることになる。

実は、読みにくいというときの読むは、今日のような黙読ではなく、音読を想定していたと考えられる。例えば、松本の胡桃沢勘内は、若いときに、『遠野物語』を声に出して読んだことを回想しているし、よく知られるところでは、折口信夫が「遠野物語」(『古代感愛集』)で詠んだように、一人でも『遠野物語』を音読している。柳田はそのようにして音読されることを想定していたはずだが、その際にカタカナ表記の振り仮名が果たした役割は大きかったにちがいない。『遠野物語』は多くの声を喪失してしまったが、一方で、声を復活させることを考えていたことになる。

一九四八年の文芸春秋新社版『遠野物語』は、その点でも興味深い。これは、初版以来のカタカナ表記の振り仮名をすべてひらがなに改めてしまった。しかも、振り仮名の量は激減している。次第に音読の習慣がなくなったこともあったと思われるが、やはり一国民俗学にふさわしい表記に変える必要があると考えた結果らしい。その時は、もはや音読は想定されず、ひたすら黙読されるテクストになったのではないか。当初目論んでいた声の復活も、すっかり骨抜きになってしまったと言っていい。本格的に声を喪失してしまったのは、文芸春秋新社版からだと言うことができる。

改めて古代文学に戻らなければならないが、今は二〇世紀の『遠野物語』の分析に留めておこう。それでも、こうした分析によって、吉本隆明の『共同幻想論』ではまったく見えなくなっていた世界が見えてくるだろう。もちろん、一方では、二〇世紀の『遠野物語』から古代文学の声を考えるというのは本末転倒だという批判があるにちがいない。だが、「宛然として古風土記をよむが如し」と頭注でつぶやいたことは無視できない。柳田が頭注に残した国際的な比較研究の示唆とともに、改めて

古代文学研究を考える視野がこのあたりから生まれてくるのではないかと考えられる。

参考文献

・石井正己『遠野物語の誕生』若草書房、二〇〇〇年、筑摩書房、二〇〇五年。
・石井正己『『遠野物語』を読み解く』平凡社、二〇〇九年。
・石井正己『『遠野物語』へのご招待』三弥井書店、二〇一〇年。
・石井正己『柳田国男を語る』岩田書院、二〇一二年。
・石井正己『テクストとしての柳田国男』三弥井書店、二〇一五年。
・石井正己『日本の名著　遠野物語』三弥井書店、二〇一五年。
・石井正己「世界史の中の『遠野物語』」『植民地朝鮮と帝国日本』勉誠出版、二〇一〇年。